



足あと

進路だより No.7

令和5年8月25日発行

発行責任者 板橋 敬史

文責 橋本 綾一

2学期のスタートにあたり...

今日から2学期がスタートします。皆さんにとって、充実した夏休みとなりましたか。今回は休み中に読んだ、松下幸之助さんの『道をひらく』(PHP)の話をしていきます。みなさんご存じの通り、松下幸之助さんとは、「経営の神様」と呼ばれ、世界的な企業となったパナソニックの創業者です。パナソニックという企業を一代でつくり上げました。そのような世界を代表する人物から学ぶことは、本当に多いと感じました。私が心引かれた一つに次のような内容がありました。

真剣に叱られる

おたがい人間は、叱られるということは、あまり気持ちのよいものではない。自分に非があったと認めていても、叱られるということはやはりいやである。だから、叱られるよりも叱られないほうを好みがちで、これは一つの人情でもある。

また叱るほうにしても、あまり気持ちのよいものではない。うれしい思いほしない。だからできれば叱らないに超したことはないわけで、これもまた一つの人情といえよう。

しかし、人情と人情とがかみ合って、アマママのウヤムヤにすぎ、叱りもしなければ叱られもしないということになったらどうなるか。神様ならいざ知らず、おたがいに人間である。知らず知らずのうちに、ものの見方考え方が甘くなり、そこに弱さと、もろさが生まれてくることになる。

もちろん、私情にかられてのそれはいけないけれども、ものの道理について真剣に叱る、また真剣に叱られるということは、人情を越えた人間としての一つの大事なつとめではあるまいか。叱られてこそ人間の真の値打ちが出てくるのである。叱り、叱られることにも、おたがいに真剣でありたい。

『道をひらく』松下幸之助 PHPより

いかがですか。心に響くものがあったのではないのでしょうか？

松下幸之助さんの偉業は、「ないない尽くしからの成功」と言われています。松下さんは9歳の時に奉公に出され、23歳で松下電気器具製作所を創業します。その時の状況は、財産も学歴もなく、健康にも恵まれない状態でした。ところが、松下さんはこの状況をマイナスとは捉えませんでした。松下さん自身、次のように述べています。

生来からだ弱かったがために、人に頼んで仕事をしてもらうことを覚えた。

学歴がなかったので、常に人の教を請うことができた。

財産がなかったので丁稚奉公に出されたが、そのおかげで幼いうちから商人としての躰を受け、世の辛酸を多少なりとも味わうことができた。

お金がないから一歩一歩着実に計画を立て、資金のダム、信用のダム、設備のダムといった小さなダムを社内につくつくり、銀行が与えてくれる信用の範囲内で融資を受けて、事業をやってきた。そのおかげで不況でも好況でも一貫して自己のペースで活動することができた。

「何もなかったから、かえって成功した」というわけです。みなさんは、これからたくさんの逆境に出くわすことでしょう。しかし、逆境こそが自分を成長させるチャンスなのかもしれません。

松下さんが大切にされたものに、『素直な心』というものもあります。この素直な心とは、「私心なく、くもりのない心、自分の利害や感情、知識や先入観にとらわれず、物事をありのままに見ようとする心」です。

現状をしっかりと見据え、成長へと結びつけましょう。



『道をひらく』PHP研究所